

趣旨説明 (2013年研究会報告 アート×ナラティブ×災害トラウマ - 記憶の紡ぎ手の役割を考える -)

著者	石谷 治寛
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	16
ページ	5-9
発行年	2015-02-28
URL	http://doi.org/10.14990/00002790

■趣旨説明

司会（石谷） 簡単な挨拶をさせていただいてから森茂起先生のお話、吉川由美さんのお話を伺いまして、討議をさせていただきたいと考えております。昨日は雨でしたが、今日は天気がよくて、非常に気持ちのいい日となりました。皆さま足をお運びいただきまして、ありがとうございます。遠くから来てくださった方もいらつしやると思いますので、今日の議論が実りあるものになればと思います。

今日は「アート×ナラティブ×災害トラウマ」記憶の紡ぎ手の役割を考える」と題しまして、講演・研究会を行います。とりわけ吉川由美さんには、お忙しい中はるばる仙台からご足労いただき、大変感謝しております。また、森茂起先生にも感謝します。アート活動とPTSD（心的外傷後ストレス障害）についての討議ができませんかどうかと話を持ちかけたところ快く返事をしていただきました。また、今日は神戸大学から森岡正芳先生に来ていただいています。科学研究費の支援でこのような企画を催すことができました。ありがとうございます。

今回の企画は、昨年の一二月にアートミーツケア学会で吉川さんの南三陸町での活動についてのお話を聞いたときに着想しました。そのとき初めて、吉川さんは震災以前から宮城県内・

仙台市内の地域再生プロジェクトの一環としてアート活動に取り組んでおり、その経験が震災後のアートを通じた被災者の支援活動につながったというお話を伺いました。

その中で印象に残ったエピソードはたくさんあります。後でお話したばかりこの話もそうですし、小学生のクラス全体で歌を作って音楽活動に取り組むという活動についても伺いました。その時、つらい経験を訴える子どもがいたもののクラス全体で音楽活動に取り組むことによって、全員で合唱できたというエピソードが非常に印象に残りました。おそらく被災地の子どもの少なからずがPTSDに直面しているのではないかと推測されるのですが、吉川さんのお話を聞きながら私が直感的に感じたのは、アート活動が人々をつらい経験にさらさせることになるのと同時に、援助者とともに経験を分かち合うことによって、それを乗り越えるきっかけにもなり得るのではないかということでした。

震災後、アートを通じた地域復興の取り組みは全国で数多く行なわれましたし、その中で「震災を忘れない」という掛け声の下、震災の記憶や経験を語るといふ観点に焦点を当てた活動も広く行なわれています。災害から二年経って、展覧会など、いろいろなタイプの活動が日本全国で行なわれています。私もその一部を展覧会などで見ることはできましたが、まだ全貌は整理しきれていない段階です。今回後ろのほうに資料を用意し

ましたが、阪神・淡路大震災以後のアート活動はいまや年表で整理されており、その頃の経験が活かされ、東日本の大震災では芸術の領域でも熱心で幅広い取り組みがなされてきているように思われます。

しかし、今回の被害は海外の報道でトリプル・ディザスター (Triple Disasters) などと言われますように、震災、津波、放射能事故の三重苦である上、また主に気仙沼、陸前高田、南三陸町をはじめとして、県をまたがる非常に広範囲にわたる被害でした。災害とアートと言いますが、美術館自体の被災から、個人のアーティストの喪失の表現、復興支援、そのサポートのための活動や、亡くなった方々の喪や哀悼の試みまで非常に幅広く行なわれています。

前置きとしては少し長くなりますが、その中から、国際的にもよく知られた写真家である畠山直哉さんの言葉を簡単に紹介しておきたいと思います。畠山は震災前後の故郷を撮影した写真集『気仙川』〔河出書房新社、二〇一二年〕のあとがきで、自分がかつて作品集に書いたことを振り返っています。

「僕には、自分の記憶を助けるために写真を撮るという習慣がない。僕は自分の住む世界をもっとよく知ることのために、写真を撮ってきたつもりだ」『ライム・ワークス』〔シナジー幾何学、一九九六年〕。畠山はかつて、日本の近代的な構成的写真やベツヒャー夫妻の即物主義的な美学を思わせる、石灰石の

鉱山や工場、その周りの街の風景などを撮ってきました。それらはコンクリートに囲まれて生活するわれわれの日常的な風景を形作っている下部構造ないしは無意識を象徴するものだと見えるものかもしれません。その後、採掘のための鉱山の爆破現場の瞬間写真によって称賛されました。情緒を排した即物的な記録としての鮮烈さが衝撃を与えたのです。

しかし畠山自身、震災以後、自分の故郷の写真の意味や自分の美意識が根本的に変わってしまったことを、この『気仙川』という本では認めています。このあとがきで、これまでである種の場所を欠いたイメージとして撮られた写真に、自伝的な記憶の思い出を付与せずにはいられない、と言っています。実際、鉱山の風景は、彼が育った陸前高田市の環境と切り離せないものでした。さらに『ライム・ワークス』やその後の採掘現場での爆破写真をいま眺めますと、高度経済成長の終わりを象徴するとも言われる、神戸の震災によって自分の立ち位置が揺らいでいると感じたあの頃の崩壊の気分を思い起こさせる作品であるような気がしてきます。

畠山は、『気仙川』として発表するまで、故郷の写真について公開するつもりはなく撮っていたようですが、次のように書いています。

だが確かに大津波はやって来て、いくら事実だとは信じられなくとも、故郷のすべてを潰し、流し、消し去った。家、商店、橋、樹

木、人々。既にそこで長い時間を送り、これからも永遠に続くことを願われていたそれらは、理解することがとうてい無理なほどの巨大な力によって、短時間のうちにこの世の外に運び去られてしまった。その時以来、箱の中の写真は、意味合いを変えた。故郷の姿はいままで人々の記憶の中と、写真の中にしか存在しない。どうということもなかった僕の写真は、僕の意図とは無関係に「記憶を助ける」ものに突然変化してしまった。姉齒橋はどのような形をしていたのか。酒屋の隣には何があったのか。あの人はどんな歩きかたをしていたのか。それを懸命に思い出そうとする時、僕にはもうこのわずかな写真しか、手がかりとなるものがない。「気仙川」あとがき」

写真につきまとう「記憶」を取りのぞいていくための美学を練りあげていた作家にとって、写真は現実から距離を保つためのある種の防衛機制として働いていたでしょう。しかし震災以後、「記憶」の侵入を抗うことができないという気持ちの変化の瞬間が——いわば心の決壊の壊れる瞬間が——この一節の中に表明されているように思います。過去の記憶がフラッシュバックとして蘇ってくるというPTSDの症状にも近い、写真家の心の動きが誠実に伝えられているように思います。

さらに畠山はこう続けています。

出来事としての東日本大震災の後では、今この世にいる人間すべてが「生存者」であるように僕には見える。……今でも心ある人た

ちが発している「忘れるな」という呼び掛けは、「震災という出来事を忘れるな」「被災者のことを忘れるな」「死者のことを忘れるな」という意味だけで発せられているのではない。あるとき僕らの多くは真剣におののいたり、悩んだり、反省したり、義憤に駆られたり他人を気遣ったりしたのではないか。「忘れるな」とは、あのと自分の心を自分が「真実である」と理解したさまざまな「忘れるな」ということなのだ。

畠山が強調するのは、死者のための喪の仕事の重要性だけでなく、トラウマティックな出来事が起きたまさにそのときの感情的な心の動きを思い起こすことの必要性です。これはトラウマ的な記憶に向き合うためにも重要な心構えだと思われまます。ただし、記憶を忘れないでいようとすることは多大な心理的ストレスとしてPTSDを悪化させることにもつながる恐れがあります。こうしたことについては森先生にご意見を伺うことができるかと思えます。

このように災害というフィルターを通してみると、アートの持つ記憶の力がとりわけ目立ったかたちで浮かび上がってくるのですが、アートや語り（ナラティブ）を通して人々の記憶に触れることがPTSDの症状などに左右するということが十分に検証されないまま活動の数が増しているのも現状です。

さらに、PTSDはトラウマティックな体験の二、三年後に発症する可能性が高いとも言われています。被災者のアートへ

のかかり方はさまざまで、個人的な経験のあり方もさまざまですが、アート活動は、新たな記憶の共有を可能にする一方、他方で個々の体験の違いといったものを浮き彫りにします。それゆえ、場合によってはPTSDの症状を顕在化させるという懸念も生まれてきます。

あるいは、支援者の側がPTSDに悩まされるという報告も多々あります。そのとき心理学の専門家のサポートは必須でしょう。最近、被災地の心のケアに関する報道も増えてきましたが、例えばPTSDの発症数は増加しているものの、心理的な問題をサポートする人材の不足が指摘されたり、あるいは被災地で配偶者間暴力(DV)の深刻化も指摘されたりしています。その関連で、児童虐待を誘発する可能性の危惧も報道され始めました。トラウマの語りにくさというのは、個々の事象が複雑に絡み合っていることと、さらにそれがあまりにも複雑なために、逆に耐えきれずその連関を遮断しようとする力が強く働いてしまうところにも現れてきます。

私が所属しております甲南大学人間科学研究所には現在、臨床心理学の分野でPTSDの診療に携わっている専門家が多数おりますし、私自身も哲学や芸術学の観点からトラウマや心理学の問題にアプローチしてきました。当研究所の設立の経緯として阪神・淡路大震災が大きいかかわっているということとも無縁ではありません。今回の企画の個人的な動機としても、災

害という話題を通して、今こうして話をしている場所の持つ意味を振り返ってみたいということもありました。とりわけ、最初にお話しいただく森茂起先生は精神分析学や臨床心理学を専門にされておりますが、PTSDの臨床に詳しい方です。森先生は特に神戸の震災の際に臨床心理士としての支援活動を積極的にこなっており、描画を用いた心理サポートなども行なっていたと聞いております。そういったお話を今回伺えるのではないかと楽しみにしております。

トラウマ・ケアの専門的な方法の一つとしてアートセラピーという分野もあります。災害とひとくくりにはされる中で現れてくるさまざまな心の問題に柔軟に対応できる心理的、医学的なサポートとアート活動は現在ますます重要な課題になってきているようにと思われれます。

今回は、まず臨床心理学の専門家の立場から森茂起先生にお話を伺い、次に吉川由美さんのアート活動での現場のお話を伺いたいと考えています。そして、休憩を挟んだ後、意見交換の後、美術史とトラウマの問題に関心のある研究者の立場から、わたくし石谷が臨床心理学とアート活動という異なる分野の接点を考えるための議論の整理を行ないたいと思います皆さんにもさまざまな専門家の立場から議論に加わっていただければと思います。今回の会が、さまざまな経験や専門的な知識を生かし、異なる専門家同士が連携していくための参考となれば

幸いです。

では、森茂起先生からよろしく願います。

■戦時体験の語りとPTSDの心理療法 森 茂起

森 この研究会は、トラウマに関心を持つ芸術研究者の石谷さんが研究所におられることで実現しました。このような意義深い企画が実現しまして大変うれしく思います。今、研究所の設立に阪神・淡路大震災が関わっていることに触れて下さいました。この土地には、震災前も今と同じく一八号館と呼ばれていた日本家屋がありました。震災で全壊しました。写真のように本来にべしゃんこになり、心理学の必要性が大学に認識されたのと時期が重なったものだから、跡地利用でこの建物の建設が実現しました。震災がなかったら、この建物はなかったことになります。

今日の私の話は、「戦時体験の語りとPTSDの心理療法」と題しています。戦争の話を中心にしながら、震災の話も交えるという形にしたいと思っております。最近、戦争に関する研究や実践を積み重ねていまして、そこから見えてきたものを紹介します。

副題の、「NETとITTの経験より」に含まれるNET (Narrative Exposure Therapy) とITT (Integrated Testimony

Therapy) は、いずれもドイツ起源の心理療法の名称です。本研究所が中心となって日本に導入しています。まだ日本には浸透していませんが、NETは最近関心を持たれていまして、関東でも実践例があります。共通する特徴が二つあります。まず、体験を徹底的に、ありのままにできるだけ詳しく振り返ることです。もう一つは、その内容を文章にして残すことです。

心理療法は必ずしも体験を徹底的に振り返るものばかりではありませんので、こういった心理療法だけが標準とは思わないでください。心理療法の中には体験を振り返らないほうがよい、振り返ることが危険であるという考えに基づくものもありますので、さまざまな立場があることを申し上げておきます。

私の主題をまとめますと、主として戦争にかかわる記憶の聞き取り、記録の経験から、トラウマの「記憶」「聞き取り・語り」「聞き取り」と「語り」は一つの営みを逆の立場から見た言葉です。「記録」「理解」といった事柄について考えることとです。そして、その全体を通して生じる「トラウマ性心的要素の変形」について考えます。

最後の部分は耳慣れない表現かもしれませんが、トラウマが生んだ心の要素があり、それがどのように変わっていくのかという問題です。「変形」は英語の transformation からの訳語です。心理療法では、その要素を、もちろん、創造的な、あるいは心の健康に寄与する方向に変えていきたいのです。あるいはこの